森泉荘だより

第 12 号
H. 4. 12. 1

母の手紙

～野口英世記念館を訪ねて～

庄司 善男

猪苗代湖の湖畔に、野口英世記念館がある。たまたま職員旅行を機に訪ねた折、野口シカの手紙（複写）を求めることができたので、その一部を紹介したい。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

『おまイの。しせ（出世）にわ。みなたまけました。わたしもよろこんでをりまする。なかた（中田）のかんのんさまに。さまに（重複）。ねん（毎年）よこもり（夜籠り）をいたしました。べん京（勉強）なぼでもきりかない。いボし（烏帽子）ほわこまりをりますか。おまいか。きたならば。もしわけかけてきましょ。はるになるト。みなほかいド（北海道）に、いてしまいます。わたしも、こころぼそくありまする。ドかはやく。きてくだされ。・・・・・・はやくきてくたされ。いしょ（一生）のたのみて。ありまする。にし（西）さむいてわ。おか（拝）み。ひがし（東）さ むいてわおかみ。しております。きた（北）さ むいてわ おかみ おりおります。みなみにむいて おかておりまする。・・・なにおわすれても。これ わすれません。・・・・・はやくきてくたされ。いつくるト、おせて（教えて）くたされ。これの へんち（返事）まちておりまする。ねてもねむられません』

（原文のママ。空白は筆者）

★ ★ ★ ★ ★ ★

これは原文でありますので大変に読みにくい平仮名の手紙で、野口英世の母シカ女から、明治四十五年、ニューヨークの博士の許に届けられたものであります。

なお、この手紙に感動された、高崎 達之助氏（元通産大臣）は、一極めて稚拙な筆で精一杯努力して書かれたこのたどたどしい手紙には、天衣無縫の母の愛が一字一字に、にじみ出ていて、照合しつつ読んで行くうちに、私はとめどもなく涙が出てきました。極貧の農家に生まれて、幼いうちに両親に別れ、信心深いシカ女祖母の手一つで育てられた七才で他家に雇われ、終日子守や野良仕事に追いまわされ、月明かり寝静まってから、指で木灰にいろはを書きり習った。この母が、博士の成功を祝し、その身を案ずる真心で書き綴ったこの手紙は、正に鬼神をも泣かしめる、天下の名文と云えましょう。」と評しております。

貧しい農家に生まれた英世は、一才半の時に囲炉裏に転がり落ちて、手に大ヤケドをしました。貧乏や手の不自由にもかかわらず、母の愛と英世のがんばりで、成績も群を

（次頁へ）

（前頁より）
抜いていたという。
生家の柱には、
「志を得ざれば、再びこの地を踏まず」
と刻まれていた。
一度は訪ねても、価値ある記念館であろう。

（森泉荘・施設長）

◎職員寄稿（その1）◎

森泉荘職員として思うこと

三浦　馨

皆さんも知っておられるように、私どもの職場は、自分で自分の事ができない、いわゆる介護を必要とし、家庭において介護を充分に受ける事ができない老人に対し、家庭に代わって介護を行う施設です。

「家庭と施設とのつながり」

一歩でも家庭に近づきたい。施設に入っていても、家庭に居る時と同じ環境で、生活させたい。

幸いにも森泉荘は、恵まれた環境にある事は言うまでもありません。広々とした庭園、池には、色とりどりの鯉が、見る人の心を楽しませ、桜や葡萄、柿の木々が季節の移り変わりを伝えてくれます。また、阿仁川の流れをながめながらの生活、この恵まれた環境を最大限に生かした生活を送ってもらう事が、我々職員の努めだとも思っております。

人は年をとると、子供に返るといわれているように、人間の一生は、何段階にも変化します。その変化に対応した介護の仕方こそが、老人を受け入れる、施設職員としての職務です。

やすらかな気持ちで毎日を送る事ができるよう、これからも最善をつくしていきますが、地域の方々、又、家族の方々のご協力を、今後ともお願いいたします。

（管理職員）

森泉荘一〇周年記念事業

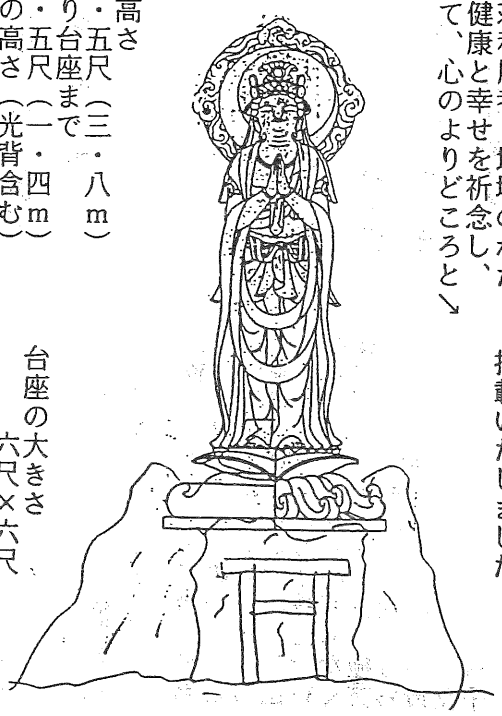
～観音像建立決まる～

平成五年四月一日をもちまして、特別養護老人ホーム森泉荘も、満一〇年を迎えます。この一〇周年を記念する事業の一環としまして、外庭の一隅に一二・五尺（台座共三・八m）の観音像を建立することとなりました。

森泉荘利用者、地域のかたがたの健康と幸せを祈念し、合わせて、心のよりどころとしての観音様の建立です。

どうか、この主旨をご理解下さいまして、利用者ご家族の皆様、地域の皆様、関係各機関、団体の皆様におかれましても、ご賛同、ご協力願えれば、幸いです。

左記に、観音像の略図等、掲載いたしました。



全体の高さ　一二・五尺（三・八m）
地面より台座まで　四・五尺（一・四m）
観音像の高さ（光背含む）　八・〇尺（二・四m）

台座の大きさ　六尺×六尺（一・八m×一・八m）
台座（男鹿石・自然石）

◎職員寄稿（その2）◎

今、想うこと・・・・

吉田　チヨ

私は、十九才で嫁にきました。何も出来なかった私に、百姓仕事を教えてくれたのが姑でした。色々な仕事を経験しながら、製材所や山仕事。夏は造林、冬は「よじふき」、と言ってもうけれど、大きく長い木を、ソリの上に乗せ、背中に付け、雪道を山の上から走らせて来る事です。その他、刷毛の内職、また縫製で八年努めました。

この介護の仕事をしたいと思ったのは、以前から何か人の役に立つ仕事をしたいと思っていたからです。私の両親は、私が中学校の時亡くなりました。少しでも親孝行のつもりで介護したいと思い、世話をさせてもらい、十年も過ぎようとしています。この仕事に入ろうとした時、三十七才でした。

三十七才で仕事を変えると言うことは、大変である。と も言われました。

私は老人の世話をするという事は、おむつ交換や入浴介助、食事介助、その他身の廻りの世話をすればよいと思っておりましたが、自分で思っているより、大変である事を知らされました。

初めは慣れないせいもあって、毎日の記録を残って書く事もありました。今は、少し慣れてきて、みんな仲良く、利用者の人に、良かったと思ってもらえる様に頑張っています。

話は戻るが、私は嫁いで、二十六年にもなりました。その嫁ぎ先は、山の中ですが、私は山が好きなので、楽しく暮らしております。その山の中に、二十年前からダムを造るという話が国から出て、移転する事になりました。

昨年から今年にかけて、それぞれ転居先へ引っ越しています。私も昨年米内沢へ引っ越しました。

二十六年間住み慣れ　土地を離れる事は、本当に寂しいものです。まして、姑たちは私たち以上に寂しい思いをしていることと思いますが、口に出しません。昔の人は、我慢強いと思います。

親戚や友達、部落十八軒、バラバラに別れてしまいました。

私は引っ越ししてから、一年になろうとしていますが、まだ時々は、部落に行って見ています。ほとんどの部落が引っ越しも終わり、各部落に二軒から三軒くらいしか残っておらず、林の木も切り倒されて、とても寂しくなっています。

私の部落でも息子が大工で、他の家を新築しているうちに、自分の家ができなくなり、この冬、一軒だけ残る事になっている人がいます。

来年は、みんな引っ越しも終わり、ダム建築が始まり、十年後には、水の底に沈んでいると言う話です・・・。

最後にお願いです。おじいさんや、おばあさんたちみんなは家族の面会をいつも待っていますから、時間を見て面会に来てくれます様にお願いして終わります。

（寮母主任）

ふれあい体験学習実施される（本年で二度目）

本年も、県立米内沢高等学校の『ふれあい体験学習』が実施され、森泉荘にも約六十名の一年生が、クラス毎に三班に別れて、お年寄りとのふれあいの時間を持った。

『ふれあい体験学習』の学習目標には、「さまざまな人々との出会いを通して、郷土に対する学習を深める。」とある。

その中で、老人施設でのボランティアは、地域の老人とふれあい、思いやりの心を育てることに主眼がおかれている。

森泉荘では、食事介助や散歩の補助、掃除などをしていただいた。また、車椅子で介助される体験もしていただいた。車椅子利用者の気持ち、介護される気持ちを少しでも分かってもらえたら、幸いである。

（生活指導員）

★厚く御礼申し上げます

平成四年七月～平成四年一〇月

奉仕慰問

七月五日　惣内婦人会
七月六日　サッキ会
七月九日　庄司チエ
七月一三日　阿仁部美容師組合
七月一八日　神成婦人会
七月二一日　サッキ会
七月二九日　高校生サマーボランティア（八月一日～八月六日）
八月（一班）三日　高校生サマーボランティア
八月（二班）三日　阿仁部美容師組合
八月三日　前田地区理容師組合
八月七日　森中生ボランティア・一班
八月一一日　森中生ボランティア・二班
八月一二日　森中生ボランティア・三班
八月一七日　森中生ボランティア・四班

善意

九月九日　佐藤アキエ
九月九日　大川哲男
九月九日　伊藤鉄治
九月九日　森吉町民協婦人部
九月一〇日　サッキ会
九月五日　足田博子
九月五日　寺田英子
九月五日　土田みか子
九月八日　前田小学校
九月一八日　一・二年生
九月二三日　藤原美知子
九月二三日　畠山淳子
九月二三日　長岐亜弓
九月二八日　前田保育園児
一〇月二日　部前田地区軍人恩給婦人
一〇月四日　庄司チエ
一〇月四日　松岡アキエ
一〇月二九日　サッキ会
○庄木司
○鈴川町民生児童委員会
○近藤孝作
○合鉄善雄
○田中フサエ
○関口シ
○神成一男
○庄司綾子
○サ京商店子
○三浦ケイ子
○工藤イ子

○神成シワ
○加賀金一郎
○秋元千歳
○伊藤鉄治
○藤嶋トミ子
○白沢イト
○森中学校
○吉中学校
○米内沢高等学校
○佐藤アキエ

○日本たばこ産業㈱
○森川妙子
○庄司作治
○東北エンゼル㈱
日本看護協会秋田県支部
鷹巣阿仁地区支部

勝手ながら敬称は略させていただきました。

こらむ

♣早いもので、平成四年も残すところあと一か月となった。

「森泉荘だより」一一二号を編集していて、本年も、保育園児から、高校生、そして、婦人会など各団体・個人のボランティア、慰問が、本当に多かったなあと感謝に絶えない。

♠八月に森吉中学校の生徒がボランティアに訪れた。同校の「はばたき運動」の一環である。この中から、柴田友喜君の感想文を紹介する。

☆『今日、一日中すごく勉強になったし、楽しかった。でも、ちょっと大変だったのが、昼食の時だった。☆お年寄りに、食べてもらうということが、むずかしかった。でも、全部普通とか、無事に過ごせてよかった。特に楽しかったのが、休み時間と、散歩だった。散歩の時、やっとお年寄りと会話ができた。とてもうれしかった。やっぱり、こういうボランティアは、いいと思った。また、遊びに来たい。』

♥この柴田君に限らず、お年寄りとの会話には、苦労する。緊張、不安もある。中学生たちは、それでも一生懸命頑張ってくれた。職員は、不安や、緊張があっても、表に出さず、笑顔で接する。これも、専門職として大変に重要なことだと思っている。